AXIS , June 2013 , vol. 163

科学するこころを引き継ぐ

『雪は天からの手紙―中谷宇吉郎エッセイ集』

中谷宇吉郎　著／池内了　編（岩波少年文庫　720 円）

評者　串山久美子（首都大学東京システムデザイン研究科教授、メディアアーティスト）

雪の結晶は美しい。自然の中から形の美を見つけた時の驚きや喜びは私も忘れられない。その雪の結晶の美しさに魅せられた実験物理学者が中谷宇吉郎である。

中谷宇吉郎は 1900 年石川県に生まれた。東京帝国大学物理学科で寺田寅彦の指導を受け、実験物理の道に進む。理化学研究所を経てイギリス留学後、北海道大学に就任し雪や氷の研究を精力的に続ける。一方で科学が社会に根付いていくことを願って多くの随筆を書き科学啓蒙家としても活躍した。

本書は、中谷の多くの優れたエッセイから北国での研究や交流のある科学者のことや身の回りにひそむ日常の科学など、科学のおもしろさを若い人たちに向けて記されている。対象を丁寧に観察し、その結果から目に見えないところで何が起こっているかを想像する粘り強い研究の姿勢がそのままエッセイにも生かされている。また、羊蹄山麓の疎開先で吹雪の恐ろしい夜に身を寄せ合いながら自身の子供たちへコナン・ドイルの「失われた世界」の話をする父としての様子が記されている。巨大爬虫類が棲む世界の探検の話に男の子は頬を赤くしながら、目を輝かせて「本当？本当？」とのぞきこむ姿が愛らしい。敗戦後の深刻な日本の状況の中でそれでも未来へ希望を託す子供達への視線が暖かく、そして切ない。「イグアノドンの唄」は 12 歳で亡くなった息子へのオマージュである。

話は逸れるが次女の芙二子さんは、1970 年大阪万博のペプシ館で人工霧を使った「霧の彫刻」を制作した環境造形作家である。人工の霧を実現するため、当初アメリカの科学者と芸術家の集団である EAT の技術者の協力で、霧を発生させる装置の研究が重ねられた。1980 年ビデオギャラリーSCAN を開設し、日本におけるビデオアートの推進者となった。そこは国際的なアーティストや機関との文化的な交流や若い作家を育てる場になった。

当時大学生の私は、そこで出始めた民生用ビデオカメラに新しい表現の可能性を感じビデオアートに夢中になった。80 年代のビデオギャラリーSCAN の活動の御陰でメディアアートやインタラクティブインタフェース研究に続く現在の自分の活動がある。恥ずかしながら芙二子さんが中谷宇吉郎の娘さんであることは、ずっと後になって知ったことだった。

2006 年に私たちはインタラクティブに温冷感覚呈示ができる触視覚ディスプレイを開発した。この表示画像に、「中谷ダイヤグラム」を使用した雪のシミュレーション CG を表示した。雪の粒を触ると条件にあわせ様々な形の雪の結晶が成長し触ったディスプレイそのものも冷たくなる。子供たちは不思議な体験のできるディスプレイを楽しみ人気の展示のようである。

3 世代に渡って読み継がれる中谷宇吉郎からの手紙が次の新しいデザインを生み出すヒントになれば嬉しい。